

源氏物語の漢訳受容をめぐる

—明治時代を中心に—

岡部 明日香

はじめに

日本文学には、仮名文で書かれた作品を、日本人が漢文に翻訳するという試みが、しばしば見られます。源氏物語は、平安時代中期の成立ですが、鎌倉時代以降、その内容を漢詩に詠じた作品や、漢文体への翻訳を試みた作品が現れます。西暦で言いますと十二世紀から二十世紀の初頭まで、実に八百年に涉ってこのような作品が作られており、源氏物語の受容史と、和漢比較文学史の両方から興味深い作品群と言えましょう。

これら一群の作品を、私は「漢訳源氏」と呼んでいます。以下に、漢訳源氏の年表を挙げましたので、御覧下さい。

【漢訳源氏作品年表】

- | | |
|-------------|---|
| 西暦十一世紀初頭 | 源氏物語成立か |
| 正応四（1291） | 『賦光源氏物語詩』（作者不明） |
| 天保九（1838） | 『紫史吟評』（成島筑山） |
| 明治十二（1879） | 二月（～九月）成島柳北、「花月新誌」に『紫史吟評』の翻刻を掲載する。 |
| 明治十五（1882） | 末松謙澄の英訳源氏物語、ロンドンで刊行 |
| 明治十八（1885） | 『訳準綺語』菊池三溪の識語（稿本成立か） |
| 明治二十一（1888） | 三溪、長崎にて足立敬亭に『訳準綺語』自筆稿本を示す。敬亭は全文の写本を作る。（刊本の底本） |
| 明治二十四（1891） | 菊池三溪没 |

- 明治二十六（1893） 一月、川合次郎『紫史』卷三（空蟬）
六月～七月、雑誌「此花草紙」に菊池三溪漢訳源氏物語のうち「空蟬」（二号 六月）、「若紫」（三号 七月）が掲載される。
- 明治四十四（1911） 七月、足立敬亭が『訳準綺語』を尚士堂（東京）から刊行。このとき、「中川水莊微行（帚木）」、「空蟬」、「雨夜赤繩」（梅暦）の漢訳が削除される。
- 大正五（1916） 足立敬亭刊『訳準綺語』が、長久堂書店から再版される。
※このころ、「小林蔵書」の印を持つ「中川水莊微行（帚木）」、「空蟬」、「雨夜赤繩」（春色梅暦第三回の漢訳）を含む写本、通称「ゲンタロウ本」が作られるか。
- 昭和十五（1940） 谷口廻瀾『源氏物語提要 紫史吟評詳解』を刊行。このとき、筑山詠の「次韻」という形で自らも源氏物語を詠じた詩を作り、同書に収める。

この中で『賦光源氏物語詩（光源氏物語を賦する詩）』は、各巻を漢詩に詠じたものですが、この形式は、江戸時代後期の『紫史吟評（ししぎんぴょう）』に受け継がれています。明治時代に入ると『訳準綺語（やくじゅんきご）』、『紫史（しし）』のような散文体の漢訳作品が出てきます。次に、今回扱う漢訳源氏の巻と訳の有無を表にして挙げました。

【今回扱う漢訳源氏の巻と訳の有無】

	紫史吟評	訳準綺語	紫史
帚木	○	○	×
空蟬	○	○	○
若紫	○	○	×
他巻	○	×	×

このように江戸時代から明治時代の漢訳は、圧倒的に空蟬巻の部分が多く、ついで若紫巻となっています。本発表では、時間の制約上、明治時代の作品を中心に上げます。ただし、江戸時代成立の『紫史吟評』も、明治時代以降に受容されていますため、あわせて扱うこととします。それぞれの研究史や翻刻については末尾の【参考文献】にまとめましたので、その都度御参照下さい。

1、『紫史吟評』

まず、『紫史吟評（ししぎんびょう）』についてお話しします。これは『源氏物語』の五十四巻について短い批評を付け、同時に七言絶句の形式で詠じた作品です。作者、成島筑山（1803-1854）は、

名は良譲、字は儉卿。江戸時代後期の儒者。成島柳北の父。幕府の奥儒者となる。和歌にも優れた。別号は稼堂。

という、江戸時代の地位の高い儒学者です。

年表にありますように、天保九年の成立ですが、公けにされたのは、明治十二年に成島柳北（1837-1884）が、雑誌「花月新誌」六十五号（～八十一号まで）に、翻刻を掲載したときです。柳北は

名は惟弘、字は保民。幕末～明治時代の儒者、新聞人。幕臣で奥儒者となる。明治維新後は朝野新聞社長として新時代を風刺した。「花月新誌」のような文芸雑誌も刊行、また『柳橋新誌』のような著作もある。号は確堂。という人物で、明治時代にはジャーナリストとして活躍しました。

以下に紹介するのは、「花月新誌」六十五号掲載の『紫史吟評』成島柳北識語^①です。

余ノ先人、講読ノ餘、戯レニ『紫史吟評』二卷ヲ草ス。未ダ世ニ公セズ。此ニ録シテ江湖雅流ノ一閥ニ供ス。先人諱ハ譲、字ハ儉卿。筑山ト号シ、後、稼堂ト改ム。嘉永癸丑ノ年十一月十一日逝ス。私ニ諡シテ「肅莊」トス。

柳北拝識

なお、筑山の自筆稿本も行方不明となっていました。近年、中野幸一氏に

よって発見され、影印が公開されました。

さて、この作品には、昭和十五年になって、島根の漢学者、谷口廻瀾(1880-1942)の注釈『源氏物語提要 紫史吟評詳解』が刊行されました。廻瀾は

名は為次。教育者、漢学者。島根県生まれ。昭和九年東京帝国大学嘱託となり、『詳解漢和辞典』編集に携わった。別号は黙溪。

という人物で、同時に「次韻」(詠源氏物語詩)も作っています。谷口廻瀾は同書の「序^②」で

小説家谷崎某、近文を以って紫女源語を訳し、世に盛んに行わる。(訳：小説家の谷崎某が、現代語を用いて紫式部の源氏物語を翻訳し、これが今の世で盛んに読まれている。)

と述べているように、谷崎潤一郎の現代語訳『源氏物語』(1939年)に触発されて、この注釈を作ったのですが、ここに昭和初期の漢学と国文学の関係を垣間見ることができます。なお、「次韻」は現在のところ、一番新しい漢訳源氏ということになります。

この『紫史吟評』は、

貞の一字、古今婦人喫緊の要義なり。(『貞』という一字は、古くと無く今と無く、婦人としての第一の守るべき道であり、女性としての生命である。)という文句からはじまることでもわかるように、儒教道徳的な見地から源氏物語を賛美しようという意識が色濃い作品です。

『源氏物語』は、その高い文芸性の一方で、密通を含んだ男女の多様な関係を描くため、近代以前の評価は複雑でした。空蝉は、年老いた地方官の夫を持つ女性で、夏の一晩、十七歳の光源氏の強引な求愛を受けて一度だけ関係を持ちますが、その後は彼を拒み通します。その心理葛藤が物語の眼目ですが、江戸時代の源氏物語研究では、彼女を「光源氏を斥けた貞女」と解釈しました。そうすることで『源氏物語』を、道徳の反面教師として男女の生態を描いた「戒淫の書」と位置付け、社会規範であった儒教道徳と共存させたのです。そ

れが、本居宣長に至って、儒教道徳とは違う次元からの評価、「もののあはれ」が提唱されたのでした。儒者や漢学者はこの作品を「淫乱の書」と斥けるか、紫式部賢夫人説や、空蟬貞女説に則って擁護するのが一般的でした。成島筑山は和歌に詳しく、仮名文学への理解もあったと思われますが、儒者の立場からこの作品を解釈すると、空蟬巻では「貞女」を第一に挙げることになるでしょう。

なお、明治以降の漢学者の漢訳が、空蟬巻に集中したのも、この巻が『源氏物語』と儒者や漢学者との接点であったからです。『紫史吟評』は、明治期の漢訳への橋渡しをした作品といえるでしょう。

2、『訳準綺語』

それでは次に、『訳準綺語（やくじゅんきご）』について、お話をいたします。これまでの漢訳源氏は、実際は物語の内容を漢詩に詠じたものでしたが、これは散文で翻訳したものです。作者、菊池三溪（1819－1891）は、

名は純、字は子顕、号は三溪・晴雪楼主人。紀伊の人、幕府の儒官から、奥儒者。明治維新後は一時警視庁御用係となるも、まもなく下野した。成島柳北と共に幕府に殉じ、専ら文筆生活に入った。

という人物です。三溪は、ちょうど成島柳北が『紫史吟評』の翻刻を掲載していたころ、「花月新誌」の編集に関わっており、両者の関係は興味深いものがあります。以下に『訳準綺語』の自序（明治十八年）に

我が邦の草紙、物語、源語（＝源氏物語）、勢語（＝伊勢物語）、竹取（＝竹取物語）

と列挙してあるように、さまざまな仮名の作品を漢訳しようと考えていました。『源氏物語』では、帚木、空蟬、若紫、の三巻の漢訳が作られました。

この作品は、三溪没後、明治四十四年に、長崎の漢学者、足立敬亭と息子の足立菰川が翻刻・刊行しました。その際の「発刊の辞」には、明治二十一年に長崎に来た三溪が足立敬亭に稿本を見せ、敬亭が稿本を借り受けて写しました

が、三溪の没後自筆稿本が行方不明となり、敬亭所持の写本が唯一の伝本となった事情がのべてあります。これは、日野龍夫氏の調査「資料紹介 菊池三溪自筆詩文稿」でも明らかです。そして、この刊行の際に、源氏物語の帚木巻と空蟬巻、『春色梅暦』の漢訳は削除したことも断わってあります。その結果、刊行された『訳準綺語』は、次の通り、

【尚士堂刊『訳準綺語』目次の収録作品一覧】

「富士仙洞」(八犬伝)・「円塚山火定」(八犬伝)

「芳龍閣格鬥」(八犬伝)・「庚申山怪異」(八犬伝)

「対牛楼報仇」(八犬伝)・「若紫」(源氏物語)

「白峰陵」(弓張月)・「旧虬山古墳」(弓張月)

「木屐入浴」(膝栗毛)

付録「幡随院長兵衛伝」

『里見八犬伝』、『源氏物語』の若紫巻、『椿説弓張月』、『東海道中膝栗毛』などの抄訳が並ぶことになりました。

なお、足立敬亭(1857-1921)は、

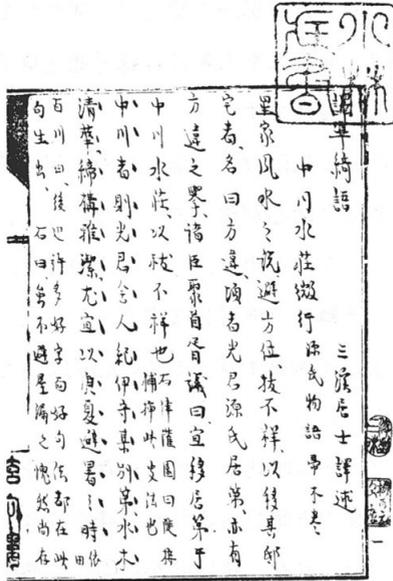
本名清三郎。長崎の漢学者。明治十年代に菊池三溪。石津灌園、依田学海らに漢学を学ぶ。

という人物で、足立菰川の遺児にあたる、小説家足立卷一氏が作品『虹滅記』(1982年4月朝日新聞社刊)で敬亭の生涯を描いています。足立卷一氏は、その中で、『訳準綺語』の刊行に

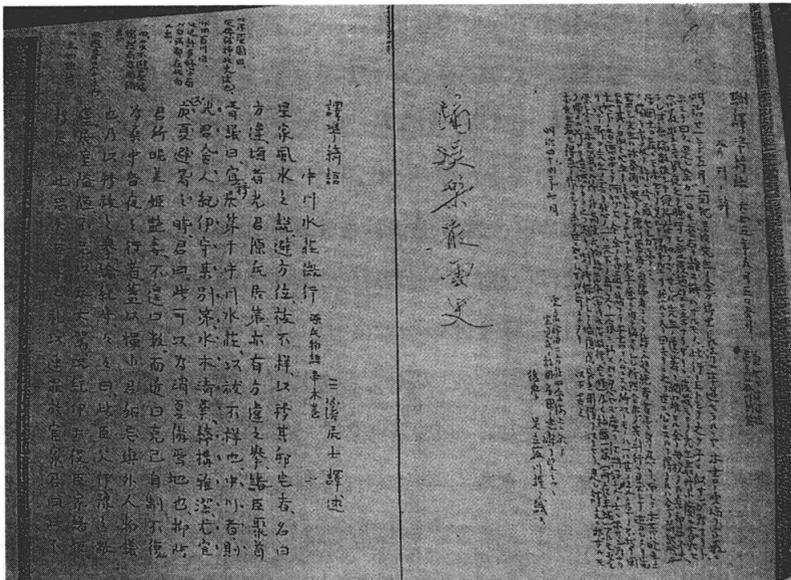
そこで推測するのだが、刊本は菰川の訓点と著者名とはなっているがこれを強くすすめて出版させたのは敬亭ではなかったのか、また、菰川の名義としたのは子に名誉を譲りたかったからではないか——と。(第七章 明治の漢文家)

と、言及しています。

現在、削除された巻は、



写本系（ゲンタロウ本）『訳準綺語』 太平文庫本冒頭部分影印
 （大平文庫42『明治漢文秘稿三種』より）



ライデン大学漢学研究所蔵『満楽散雲史』（ヴァン＝グーリック旧蔵本）
 冒頭影印（王三慶氏提供）

のように写本の形で伝わり、近年影印や翻刻が公開されています。

他に、空蟬巻と若紫巻は、明治二十六年に雑誌「此花草子」に掲載されたことがあります。これは三溪没後です。

これら写本には石津灌園と依田百川（学海）の注釈も確認でき、当時の漢学者の『源氏物語』への興味と関心が窺えます。ただし、自筆稿本が失われた後、どのようにして写されたのかは不明で、今後の課題です。

ところで三溪の訳は、空蟬巻で検討しますと、冒頭近くで

美姫、空蟬に挑むも、空蟬従わず。（訳：光源氏が美姫、空蟬に求愛したが、彼女は従わなかった。）

と明言しているところは、江戸時代までの「貞女」観を受け継ぐかに見えます。ところが、光源氏が、空蟬の継娘である軒端の荻を描写するところは、

其の一人、則ち朝（軒）端荻、東に向かい而して便坐するに、豊艶にして肥白、羅衣雪のごとく、紅裳火を欺く。胸襟畢露（ととく）わに、紅翠二色を以て（かさ）襲ね、襦衣梳装（しんいせしやう）、絶艶の媚態人を動かさむ。（訳：その一人が、軒端の荻であった。東を向いて楽に座っているが、豊満で色白、薄い衣は雪のような白で赤い裳は炎のように鮮やかである。胸を全部はだけて、赤と緑の上着を重ねているが、肌にぴったりした単衣に、なげやりな着こなしは、素晴らしい媚態で人の気持ちを動かす。）

と、非常に艶麗で、三溪の文芸的、艶情的な表現が生かされています。ここに対応する源氏物語の本文は、江戸から明治にかけての流布本『湖月抄』では

●軒端荻の描写（『湖月抄』延宝九年版本より）

いまひとり（軒端の荻）は、ひんがしむきにて、のこる所なくみゆ。しろきうすものゝひとえがさね、ふたあゐのこうちぎだつもの、ないがしろに（傍注：しどけなき也）きなして、くれなるのこし（傍注：『孟津抄』袴の腰也）ひきゆへるきはまで、むねあらはに、ばうぞくなるもてなし也。（訳：もう一人は東向きに座って、全部見える。白い薄物の単を重ね、二藍色の小桂のようなものをだらしなく着て、紅色の腰に巻きつけた衣のと

ころまで、胸をはだけて、大胆な様子である。

● 「ばうぞくなる」の湖月抄頭註（傍線は発表者）

『細流抄』河海（『河海抄』）には「傍側（パウゾク）」云々、花鳥（『花鳥余情』）には「飽足（ボウゾク）なり。にぎははしくほこりかなり」と云々。然れども「傍側」猶宜欵（ヨロシキカ）。傍若無人の心なるべき也。は、かる所なき心なるべし。

というように、軒端の萩に「はうぞくなり＝傍若無人」という否定的な評価を与えているところです。また、三溪は、空蟬巻の末尾で、

蟬姫の遺すところの単を抱き、而して出ず。乃ち小君を喚び起こすに、小君驚き起きて戸を放ちて而して出るに、老婢誰何して曰く「族居するは小君か」と。応じて曰く「麿なり」と。曰く「夜深し。出るは、はたこれ何ぞ。」と。小君これに憚り、先に光君を戸外に出でしむに、暁月昼のごとく、人影地にあり。老婢また問いて曰く「誰と居て同行せるや」と。曰く「民部、侍す。」と。曰く「老大長身たり。すべからく怪しむべからざるなり。」と。曰く「君また、まさに身長みちようずれば比肩して相譲らざるべし」と。乃ち相偕あいたもに戸を出て廊を循めぐりて去る。（＝あの空蟬の脱ぎ捨てた薄衣を取って光源氏はお出になった。小君が近くに寝ていたのを起こしなされると、すぐに目を覚ました。戸をそっと押し開けると、老いた女房が「あれは誰」などと尋ねる。小君が「僕だよ」と答えた。「夜中に一体どうして歩き回りなされるのです。」という。小君は老女を憚って光源氏の君を押し出すと、暁の月が昼間のように明るく人の影が地にさした。「もう一人いるのはどなた。」と老女は問う。さらに「民部さんですね。貴方は背が高いから間違いない」と言う。「大きくなれば、きっと小君様も同じくらいの背丈になりますよ」と言って、戸口に出て廊下を廻って去った。）

というように、光源氏が再び空蟬に忍んだものの、逢えずにその衣だけを手に入れた帰りがけに、老女に人違いをされる場面で、訳の筆を擱いています。この部分は次に挙げた源氏物語本文とほぼ一致していますが、描写は三溪の方が

簡潔です。

●空蟬巻（『湖月抄』延宝九年版本より。「」は発表者が付した。）

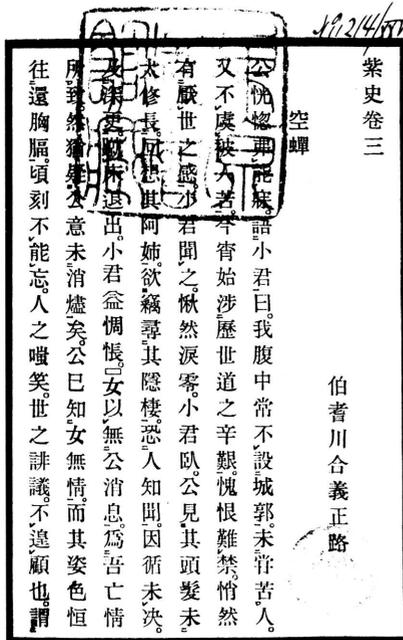
かのぬぎすべしたるうすきぬをとりていで給ひぬ、こ君ちかくふしたるを、おこしたまへば、うしろめたう思ひつつねければ、ふとおどろきぬ、とをやをらをしあくるに、おいたるごたちのこ糸にて、「あれはたそ」とおどろおどろしくとふ、わつらはしくて、「まるそ」といらふ、「夜中にはなそありかせ給」と賢しかりてとさまへく、にくくて、「あらず。ここともへ出るそ」とて、君（光源氏）ををしいで奉るに、暁ちかき月くまなくさしでて、ふと人のかげみえければ、「またおはするはたそ」ととふ。「民部のおもとなめり。けしうはあらぬおもとのたけだちな。」といふ。たけたかき人の常にわらはるゝるをいふなりけり、おい人これをつらねてありきけると思ひて「いまだ今たちならびたまひなん。」といふいふ、われも此とよりいでてく、（訳：あの空蟬の脱ぎ捨てた薄衣を取って光源氏はお出になった。小君が近くに寝ていたのを起こしなされると、気にしながら寝ていたので、すぐに目を覚ました。戸をそっと押し開けると、老いた女房の声で「あれは誰」などと大げさに尋ねる。煩わしいので、小君が「僕だよ」と答えた。「夜中に一体どうして歩き回りなされるのです。」などしたり顔で外の方にやって来る。とても憎くて、「違うよ。ちょっとここに出るだけ。」と言って光源氏の君を押し出し申し上げると、暁近い月の光がくまなくさして、ふっと人の姿が見えたので、「もう一人いらっしやるのはどなた。」と老女は問う。一人合点で「民部さんですね。お見事な背丈だこと」と言う。背が高くても笑われている人のことだった。老女は小君が女房を連れて歩いているのだと思い、「今にすぐ。小君様も同じくらいの背丈になりますよ」などといいながら、自分も戸口に出てきた。）

源氏物語は、このあと空蟬と光源氏それぞれの苦悩や嘆きを詳しく描きますが、三溪の訳は、艶麗な一夜の物語として空蟬巻を読めるような構成に直しているともいえるでしょう。三溪は、江戸時代の道徳的な源氏物語観から、本来

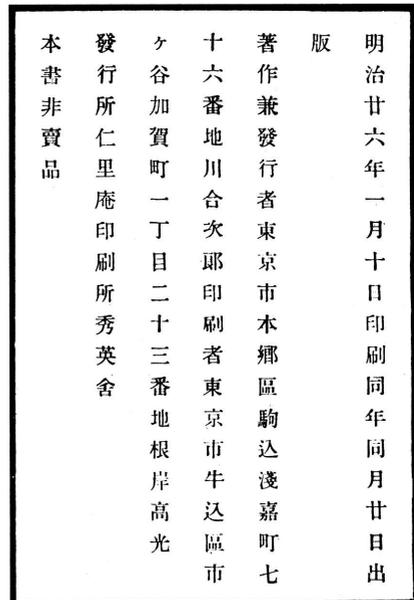
の文芸作品としての受容に立ち戻り、その上に自己の解釈を加えたものと思われれます。

三、『紫史』

最後に、もう一つの源氏物語漢訳作品として、『紫史』についてお話ししたいと思います。作者の川合次郎は、『紫史』の冒頭及び奥書から、名は義、字は正路、伯耆の人で、仁里庵と号したか。と判断できるのみで、他に資料がありません。この作品は明治二十六年の刊行で、国立国会図書館に空蟬巻の部分のみ残っています。第三巻と書いていますが現在、他の所蔵はわかりません。その意味では、『訳準綺語』とは対照的な作品です。



『紫史』国会図書館蔵本 冒頭部分影印



同書 奥付影印

さて、この『紫史』は、冒頭部や和歌が非常に原文に忠実な訳になっているのが特徴です。冒頭部は

公、恍惚として寐るあたわず。小君に語りて曰く、「我、腹中に常に城郭を設けず。未だかつて人を苦しめず。又人に苦しめらるを虞おそれず。今宵はじめて世道の辛艱きこんに歴渉す。愧恨しゆうぜん禁じ難し。悄然として世を厭うの感あり。」小君これを聞く。愀然しゆうぜんとして涙こぼる。小君臥す。(訳：光源氏の君は呆然として眠れず、小君に語って言うには「私は心の中に隔ての城を設けたことはない。人を苦しめたこともないし、人に苦しめられることもおそれない。それが今夜はじめて世に生きるつらさを知って、怨む気持ちがどうしようもない。がっかりして世を厭う気持ちがわいた。」と。小君はこれを見て、悲しくて涙がこぼれ、横になっていた。)

ですが、これを次の源氏物語本文と比べると、逐語訳に近いことがわかります。

●空蟬巻冒頭（『湖月抄』延宝九年版本）

ねられたまはぬままに、われはかく人にくまれてもならぬを、こよひなんはじめてうしと世をおもひしりぬれば、はづかしくて、ながらふまじくこそ思ひなりぬれ、などの給へは。泪をさへこぼしてふしたり。(訳：光源氏の君が、おやすみになれないままに、「私は、こんな風に他人に憎まれることは慣れていないのに、今夜はじめて、(空蟬の拒否によって)世の中を憂鬱なものと思い知ったので、恥ずかしくて、もう生き長らえることができそうになく思うようになった。」などとおっしゃるので、小君(空蟬の弟)は、涙までこぼして横になっていた。)

また、この巻には末尾近くに和歌があります。その部分の訳は、漢文体のように見えますが、実際は下記のように

●空蟬乃身衰変底許留木乃許爾猶人加良乃懐志幾加奈（光源氏）

(うつせみのみをかえてける木のもとになほ人からのなつかしきかな：
訳：蟬が抜け殻を残して姿を変えて去った木のもとで、同じように衣を残していったあの人の奥ゆかしさがなつかしいな。)

●空蟬乃羽爾置露乃木隠底忍忍濡袖加奈（空蟬）

（うつせみのはにをく露の木かくれてしのひしのひにぬるるそてかな：
訳：蟬の羽に降りる露のように、私は木の蔭に隠れて、人知れず忍び忍び
に涙で袖が濡れることです。）

源氏物語本文の和歌を、万葉仮名で音のみを写したものです。

この作品は、偶然の可能性はあるにしても、空蟬巻の訳というところに、明治期の漢訳としての共通性を見出すことができます。この作品と作者については、今後詳しいことを調べたいと思います。

むすびに

ところで、いままで考察してきた漢訳作品はすべて、明治十八年から二十六年までに出ています。明治二十年代までは、漢文学は江戸時代までの遺産と、明治初年の清国使節団と日本の文人の交流などもあって、隆盛期を迎えていました。時代の機運と、儒教道徳の規制が外れたことから、漢学者にとって、源氏物語や仮名の文学が新鮮な題材と映ったことは、容易に想像できます。

一方で、『訳準綺語』に先立つ頃、末松兼澄が、世界で初めての源氏物語の英訳を出しました。これは、源氏物語を、中国の影響を受けない純粋な日本の文化遺産として西洋に紹介しようとしたものでしたが、この点について観学者依田学海との間で論争があり、それにはパトリック・カドー氏の「依田学海と末松謙澄—『源氏物語』初英訳をめぐる討論—」に論考があります。また、この訳には平川祐弘氏が「空蟬の小桂—道徳的判断や心理的規制は翻訳や解釈をどのように歪めたか—」で、源氏物語が「サロンの社交劇と化して行く」と評したように、筋や設定を強引に変えたところもあります。

このように、源氏物語が、この時代に一気に入ってきた異文化に対して、日本文化の代表とみなされて、その紹介に関心がもたれたことがわかります。さらに、明治時代の漢学者たちが源氏物語の漢訳に向けた意図は、まずは江戸時代までの儒教道徳的な源氏物語観からの解放にあったと思われる。それは、

彼等の「文学」への態度の変換をも意味しました。文学を、道徳や修身、政治の道具ではなく、独立した芸術として賞美することを、かつて儒者だった菊池三溪は、軒端の萩への艶麗な描写で表現しています。

もともと源氏物語は漢文学の影響を強く受けた作品でした。それが、明治時代以降は、時代との融合を模索する漢学者たちの創作意欲を刺激し、漢訳の形で開花させました。これは、源氏物語の側から漢文学へ及ぼした影響として意義のあるものといえます。この作品に限らず、近代以降の漢文学・国文学は、共に古典を継承し相互に刺激しあって進んできました。その伝統を受け継ぎ、今後は「漢訳源氏」の作品の検討と、同時代の国文学や西洋文学との交渉の解明を進めてゆきたいと思います。

参考文献

①影印（含解題）

●中野幸一「成島筑山自筆稿本『紫史吟評』」（『源氏物語の享受資料—調査と発掘—』武蔵野書院 一九九七・十一）

●斎田作樂『明治漢文秘稿三種—訳準綺語・枕蔵史・春史日録—』（太平文庫四十二 一九九九・三）

②翻刻・注釈（含解題）

●成島柳北「紫史吟評 翻刻」（『花月新誌』六十五号～八十一号掲載）

●谷口廻瀾『源氏物語提要 紫史吟評詳解』（谷口廻瀾先生還暦記念刊行会一九四〇・九）

●足立敬亭『訳準綺語』尚士堂（一九一一）・長久堂書店（一九一六）

●内山知也・王三慶『訳準綺語』（『日本漢文小説叢刊』第一輯第一巻 台湾学生書局 二〇〇三・十一）

③その他の解題、解説

●藤田徳太郎『源氏物語研究書目要覧』九四頁（六文館 一九三二・三）

●阿部秋生・岡一男・山岸徳平『増補 国語国文学研究史大成 三 源氏物語』上三十八頁「研究史通観 二 明治・大正期（三省堂 一九七七・七）

●伊井春樹編『源氏物語注釈書・享受史事典』「紫史吟評」の項（東京堂出版 二〇〇一・九）

④明治漢学・翻訳などの参考論文・文献

●三浦叶『明治漢文学史』（汲古書院 一九九八・六）

●日野龍夫「資料紹介 菊池三溪自筆詩文稿」（『国語国文』四十六～九 一九七七・九）

●足立卷一『虹滅記』（朝日新聞社 一九八二・四）

●平川祐弘「空蟬の小袿—道徳的判断や心理的規制は翻訳や解釈をどのように至めたか—」（『福岡女学院大学紀要（人文学部編）』十二 二〇〇二・三）

●パトリック・カドー「依田学海と末松謙澄—『源氏物語』初英訳をめぐる討論—」（風間書房 伊

【注】

- ①原文は旧字体。読解の便を考え、発表者が句読点と鉤括弧を付した。
- ②原文は漢文。以下、訓読と現代語訳は発表者による。
- ③原文は漢文。以下、訓読と現代語訳は発表者による。
- ④軒端萩の描写は、下記の『修紫田舎源氏』四編上にも拠っていると思われるが、彼女の上着を「紅と緑」とする対句などは源氏物語にも『修紫田舎源氏』一致しない、漢文的な美女描写の表現といえよう。
 - 『修紫田舎源氏』四編上（傍線は発表者）（岩波書店新日本古典文学大系）
今一人は東に向きて、残るところもなく見えたり。桔梗染めの薄物を、さもしどけなくひき纏ひ、腰ひき結へる紅も、ちらめくばかりに乳の下まで、胸も露はに押しくつろげ、色いと白う肥えたり、髪ふさやかに結び上げて、額襟元清らに見え、目元口元愛敬づき、いと華やかなる形にて、悪しきところはあらざれど、心静かに持ちなさば、なをも床しく見ゆべきと、これをまことの村萩とは、夢にも知らず光氏は、心のうちに思しけり。
- ⑤『修紫田舎源氏』四編上は、この「人違い」の場面で終わっている。三溪もまた、これに倣った可能性もある。

* 討議要旨

加藤昌嘉氏・相田満氏・ロバート＝キャンベル氏より、江戸から明治時代にかけての『修紫田舎源氏』や源氏絵による描写との関連、また明治初期の『野史・稗史』としての源氏物語観との関連を指摘された。

金中氏からは、和歌を万葉仮名で表記したことから、想定されうる読者について質問が出た。発表者は、日本人向けの漢訳の証左との見解を示した。

関礼子氏は、近代文学全体の中で、このテーマの今後の見通しを質問した。発表者は、近代から現代にかけての漢学衰退の中で、漢訳作品の流れと意義を考えたいと答えた。